「精神保健福祉援助演習Ⅰ」における学生の学びの実際
―演習の意味を考える―

入　江　多津子　　平　林　恵　美

Pedagogical value of a Seminar in Psychiatric Social Work
- Considerations of the significance of the seminar -

Tazuko Irie, Emi Hirabayashi

抄　録

「精神保健福祉援助演習Ⅰ」が精神保健福祉の学習全体の中で、どのような位置づけにあるのか、またその意味についての考察を行い、まとめることとした。演習ではグループワークという教育方法をとり、その中で学生自身がどのように変化して行ったのかを、自己評価表にそって、学習チェック（初期・中期・後期）を実施した。殆どの学生が、時間的経過とともに自己評価の得点が上昇した。また、学生の演習への参加状況は97.2%であった。現代のデジタル思考になれている学生は「聴く」というコミュニケーションの過程においては、クライエントの持つ考えや感情に対し、それが良かったか、あるいはそうでないかの判断を求める場合が多い。確かに、在るがままにクライエントを受容することは難しい。しかし、この演習のグループワークを通し、少しでも相手の気持ちが分かっただけでも前進である。演習がソーシャル・ワーカーの態度の育成という一側面を考えれば、この演習は専門職の養成には重要な位置づけがなされると考える。

キーワード：演習
グループワーク
自己評価表
態度育成

はじめに

演習とは、広辞苑によると「大学・大学院などで、教授の指導のもとに学生が研究・発表・討議を行うことを主眼とした、少人数の授業の形式。ゼミナール。ゼミ。」と定義されている。

この演習は、精神保健福祉士の受験資格を取得するために、なぜ必須科目として学習が必要なのか、また学生はどのように学習をするべきなのか、という演習へ疑問とその意味を確認するという認識に立ち授業を開始した。

そもそも演習というものについての授業方法は、画一的なものはない。その演習を担当する教員により、その科目の目的を達成するためにさまざまに、担当教員が創意工夫をしながらその目的を達成する。

そういった意味では、学生のニーズを加味しながら、演習を進めていく教員の力量がまさに試される授業といっても過言ではない。この演習では学生が、精神保健福祉援助に関して、「援助の実際」を演習の中で、自分の関心のある事項の調査・研究を行い、まとめ、そして発表し、その中で自ら学ぶ、という組み立てを作成した。学生が担当する事項は一分野ではあるが、そのことが、精神保健福祉という大きな支援に汎化できれば、演習の目的は達することが出来たといえる。

具体的には、当該演習は、実習と講義の中間的な位置づけで、講義で得た知識を現場という実習に向け、演習という準備段階で様々な事例を具体的に考え、それを自分の言葉で表現し、周囲のものとコミュニケーションをはかりながら、精神保健福祉援助を考えていくことである。

実習を目の前にし、ともすれば実習に重きを置くような演習とならぬように、演習の目的を達成するために、今回、授業の進め方に幾分かの工夫を行った。その中で、行った授業の工夫と学生が学び得たものについての一部を紹介したい。

1　目　的

この演習が精神保健福祉の学習全体の中で、どのような位置づけであるのかを振りかえり、学生にとって演習というものの意味、演習方法の効果について、考察を深めたいと考え、まとめることとした。

2　演習の実施期間及び対象

平成22年４月12日～７月26日まで。精神保健福祉士の受験資格取得を希望する福祉心理学科３年生・23名

3　演習の進め方

「精神保健福祉援助演習」の学習は、学生自身が主体的に行う授業である、ということを前提に授業を始めた。演習の進め方は、それぞれの教員の独自の教育観や個性が発

揮できる自由なものである。今回はグループワークという学習方法により、学生自身が学習の進展を図った。

そこで、我々は個人の学習がグループのなかでどのように進展して行ったのかを振り返り、精神保健福祉援助の一連の演習過程の授業を評価した。具体的には、学生へのアンケートを３回（初期・中期・後期）実施し、学生の学びの確認を行った。また、演習のボランティア２名にも演習の学生たちに話をお願いし、評価のアンケート記入を依頼した。

授業日程は前期４月から７月までの15回（30時間）を初期（１～５回）・中期（６～10回）・後期（11～15回）と便宜上区分した。

１）演習を進めるにあたっての留意点

学生が取り組む調査・研究課題は、地域に密着したテーマの設定とした。それぞれのテーマの中で、精神障害者の在宅福祉を考え、また当然に学生自身の興味も加味され、援助の具体的方法が理解できることである。この授業は精神保健福祉士の資格取得のた

表１　精神保健福祉援助演習Ⅰの授業の進め方

回数	月　日	授　業　項　目	備　　考
1	4/12(月)	演習の進め方 精神保健福祉援助演習の視点と体系 対人援助サービスに必要な基本的態度 学習の進め方	講義形式 自己学習が原則 人間関係の重要性について強調する
2	4/19(月)	討議法・発想法 ブレーンストーミング・ワークショップ	講義形式 精神障害者の地域生活について課題を考える
3	4/26(月)	薬物依存者・高次脳機能障害者の在宅生活について課題 演習における記録の仕方	講義形式　４・５回の話に向けて教員による薬物依存、高次脳機能障害者の講義
4	5/10(月)	薬物依存者の話、山梨ダルクサポートセンター	障害者の生活実態の話
5	5/17(月)	高次脳機能障害者の家族の話、介護する母親の話	障害者の生活実態の話
6	5/24(月)	グループワークのすすめ方、グループ編成	学生の希望を聞く
7	5/31(月)	グループワーク　研究テーマ・調査方法の検討 グループ活動	グループに分かれ、各グループでのテーマ設定
8	6/7(月)	グループワーク　資料収集	まとめの方法を検討
9	6/14(月)	グループワーク　必要時、現地調査	現地調査
10	6/21(月)	グループワーク　必要時、現地調査	現地調査
11	6/28(月)	グループワーク　研究のまとめ	
12	7/5(月)	グループワーク　発表準備	発表準備
13	7/12(月)	発表　（１，２，３グループ）	
14	7/19(月)	発表　（４，５グループ）	
15	7/26(月)	グループワーク・全体のまとめ・評価	演習の振り返り　自己評価

めの重要な必須演習でもあるので、『精神保健福祉士の役割・あり方』というものについて、勿論まとめる必要があろう。

演習を進めるために、学生と教員との間で、以下の点に留意しながら行った。

① 精神保健福祉援助演習は、学生自身が考え、実践する授業である。

② 演習の目的は、講義で学んだことを自分自身のことばで、表現し、発表することである

③ 与えられたグループの中で、人間関係を学びながら、グループとしての学びを得ることである。

④ 調査・研究のために外部との接触を持つときには、事前に教員に連絡することが必要である。

上記のことを、第１回目の最初の時間に学生に確認し、演習を進めた。授業のすすめ方は、表１のとおりである。

最後に知識の評価として、まとめの確認として筆記テストを行った。

２）演習の具体的展開

具体的進め方では、まず最初に学生が取り組みたいテーマ・事項を各自、メモタックに挙げてもらい、それをクラス全体で何度も検討し、さらに絞込み、最終的には５グループを編成した。その前に、このグループ分けがスムーズに行くように、発想法の講義とその実際を行った。

受講学生は当初24名であったが、１名受講せず、23名となった。学生がグループで選んだテーマは以下の５つである。以下、グループ編成順に掲載する。

・グループ１（マーボー豆腐）一般就労における精神障害者の職業的自立の現状と課題

・グループ２（チームⅡ）うつ病患者の生活上の問題について

・グループ３（グループウーパールーパー）統合失調者からみる支えとなる人間関係について

・グループ４（きみどり）精神障害者の現状と地域の取り組み

・グループ５（池田医院）薬物依存者に対する偏見、フラッシュバック等の生活困難

（　　）は学生が自分たち独自で名前をつけたグループ名である。

ここで、学生が自分達で精神障害者についての調査・研究を行うためには、精神障害者の現実的な話が必要であった。そのため、第４、５回目に、在宅で障害者として生活しているダルクの職員、高次脳機能障害の息子を持つ母親（以下演習ボランティアと称す）にボランティアとして、演習に参加してもらった。

地域での活動をしている当事者と家族の声を聞くことにより、リアリティーのある演習になるとを考えたからである。しかし、この演習ボランティアから、いきなり地域の障害者や家族の話をしてもらうには、学生は、知識の面で準備不足が考えられる。そこで、当事者の話をより理解を深めてもらうために、第３回目に、薬物依存、高次脳機能

障害について、教員が事前講義を行った。

3）授業の結果および評価

学生の学びに対する評価を、⑴学生の演習内容への興味、⑵グループワークを通しての自己評価、⑶教科書について、⑷演習の授業評価、についての評価を行った。

⑴　学生の演習内容への興味について

当初、学生は自分自身の興味のあるテーマを研究・調査することであったが、グループとして演習を進めるためには、自分自身のテーマだけではなく、グループ内における他のメンバーとのコミュニケーションや意見の調整という基本的人間関係が重要になってくる。

まず、グループワークを始める前、演習ボランティアの話を聞くことにより、生活課題を具体化することとした。

①　演習ボランティアの話を聴いて

演習ボランティアの生活実態の話を聴くにあたって、各自の学習目標、学んだこと、講義をきいて新たに生じた疑問点、今後の課題等、自己評価（資料１）について、記入をしてもらい、演習をスムーズにすすめる為の導入を行った。２回にわたる演習ボランティアの話を聞いて、自己評価したものについて、まとめたのが、表２、表３である。

学生は、薬物依存者、高次脳機能障害者の講義を聞いて、１回、２回とも、実に「授業への参加意欲が湧いた」「今後は、さらに自己学習をし、理解を深めたい」という高い自己評価がなされた。このことはグループワークを進める上での強い動機づけとなった。

薬物依存・覚醒剤再発防止に取り組むダルクの人の話を聞いて、学生たちは生活実態の一部が理解できたようである。

又、この講義を聴くことにより、学生がグループでの研究課題として自分達で、ダルクのメンバーが居住している施設に意見を求めに行ったことは特筆すべきことである。

高次脳機能障害者を持つ母親の話では、実際に障害者の話を聞くことにより、なかなか、教科書・参考書では得られぬ情報を得ることが出来た。また、学生はなぜ、高次脳機能障害者が精神障害者保健福祉手帳の対象であるかの理解ができた。

②　演習ボランティアの要望等

講義の終了後、大学にボランティアとして、生活実態を学生に話すことについての紙面上での意見を伺った。その中から、彼らが学生について感じた事の一部を紹介すると、以下のとおりである。

ダルクの職員は、

・授業に何度でも呼んでほしい、薬物による障害者のことを理解してほしいので、福祉の現場を担う学生と何度でも話したいとの希望があった。

また、高次脳機能障害者の母親は、

・高次脳機能障害者の実際を知ることは、大変に意義のあることである

資料１

精神保健福祉援助演習Ⅰ

学籍番号：＿＿＿＿＿＿＿＿　　氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

日　　付：平成　　年　　月　　日
本日のテーマ：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
講　　師：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

１．本日の講義における各自の「学習目標」

２．本日の講義において「学んだこと」（学習成果）

３．本日の講義を聞き、新たに生まれた「疑問点」

４．本日の講義を受けて、精神保健福祉を学んでいく上での「今後の課題」

５．自己評価（数字に〇印をつけてください。「３」が自分なりの普通）

①講義内容を多面的に捉えようと自分なりに努力した	１・２・３・４・５
②精神保健福祉に関連する分野に広く関心を向けるよう努力した	１・２・３・４・５
③疑問点を解決するための方法を考えた	１・２・３・４・５
④授業を受けるに当たり、事前学習等の準備をした	１・２・３・４・５
⑤授業への参加や意欲が湧いた	１・２・３・４・５
⑥今後は、さらに自己学習をし、理解を深めたい	１・２・３・４・５

★　**講師の方への「質問」は、出席票に記入してください。質疑応答の際に使用します。**

表２　演習ボランティアの話を聞いて―①

高次脳機能障害者家族の話を聞いて

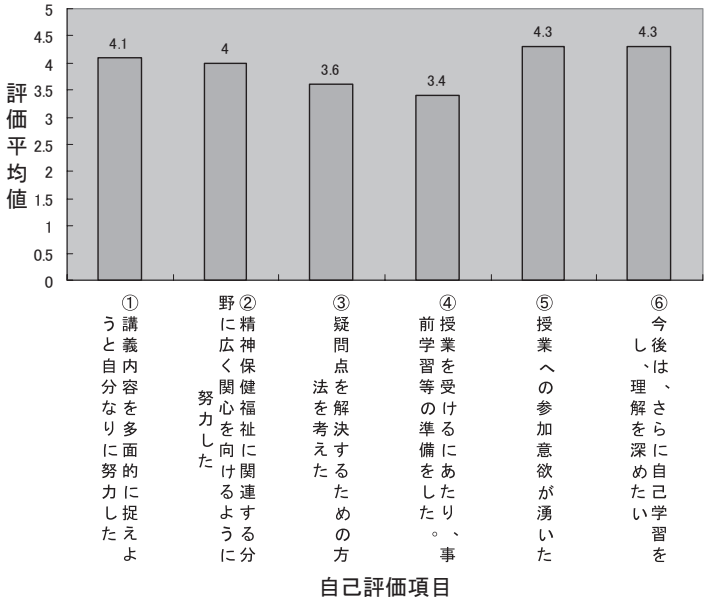
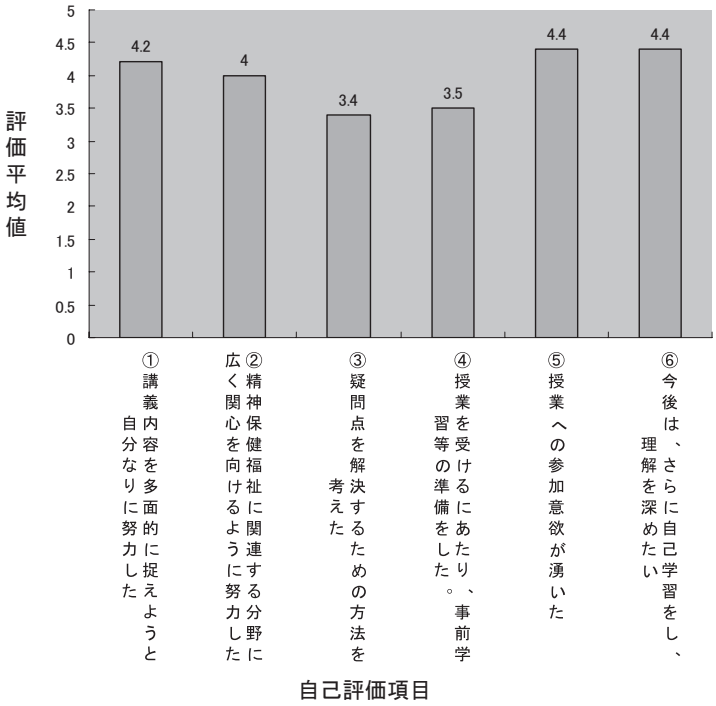


表３　演習ボランティアの話を聞いて―②

ダルクの当事者・職員の話を聞いて



・精神保健福祉援助を目指す学生にとっては、障害者の生活実態の把握は重要である

将来の福祉を担う学生に対して、積極的な情報提供と熱心さ、有効性をアンケートから伺えた。

実習に行く前の学生にとって、障害者の生活実態に触れることは、講義では得られぬ事柄であり、自らの課題を発見する演習の目的に近づくことである。２名の演習ボランティアからの実際の生活を通しての話は、教科書・参考書では得られぬ新鮮な情報であった。演習ボランティアの意見としては、福祉を将来担う学生たちには、現場の実際の話は有効であり、機会があれば、また何度でもお話したい、と学生に期待する意見であった。

⑵　グループワークを通して、学生の自己評価

演習にグループワークという教育方法をとったが、果たして、この演習が自分のものとして、学生に受け入れられていたのか、演習を進める過程で、学生自身がどのように

表４　学生の自己評価

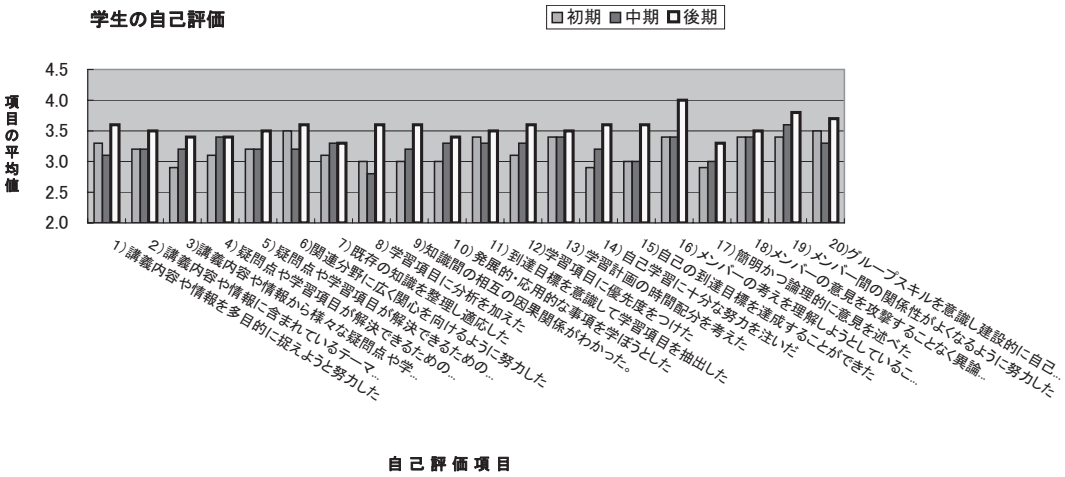


表５　学生の自己評価（3.6以上）

自　己　評　価　項　目	点数
メンバーの考えを理解しようとしていることを示した	4.0
メンバー間の関係性がよくなるように努力した	3.8
グループスキルを意識し建設的に自己の役割を果した	3.7
講義内容や情報を多目的に捉えようと努力した	3.6
関連分野に広く関心を向けるように努力した	3.6
学習項目に分析を加えた	3.6
知識間の相互の因果関係がわかった。	3.6
学習項目に優先度をつけた	3.6
自己学習に十分な努力を注いだ	3.6
自己の到達目標を達成することができた	3.6

資料２

精神保健福祉援助演習Ⅰ　　学生自己評価表

グループ	学籍番号	氏　名	月　日	月　日	月　日	月　日	月　日
			程　度	程　度	程　度	程　度	程　度
学習態度評価			3が自分なりの普通	3が自分なりの普通	3が自分なりの普通	3が自分なりの普通	3が自分なりの普通
内容１）	講義内容や情報を多目的に捉えようと努力した		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
内容２）	講義内容や情報に含まれているテーマを推測した		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
内容３）	講義内容や情報から様々な疑問点や学習項目を抽出した		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
学習態度４）	疑問点や学習項目が解決できるための方法を考えた		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
学習態度５）	疑問点や学習項目が解決できるための資料収集を行った		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
学習態度６）	関連分野に広く関心を向けるように努力した		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
学習方法７）	既存の知識を整理し適応した		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
学習方法８）	学習項目に分析を加えた		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
成果９）	知識間の相互の因果関係がわかった		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
成果10）	発展的・応用的な事項を学ぼうとした		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
成果11）	到達目標を意識して学習項目を抽出した		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
成果12）	学習項目に優先度をつけた		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
学習方法13）	学習計画の時間配分を考えた		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
自己学習14）	自己学習に十分な努力を注いだ		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
達成感15）	自己の到達目標を達成することができた		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
他者理解16）	メンバーの考えを理解しようとしていることを示した		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
プレゼン能力17）	簡明かつ論理的に意見を述べた		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
プレゼン能力18）	メンバーの意見を攻撃することなく異論を述べた		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
調整能力19）	メンバー間の関係性がよくなるように努力した		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５
ＧＷスキル20）	グループスキルを意識し建設的に自己の役割を果たした		１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５	１ ２ ３ ４ ５

変化して行ったのかを、自己評価表（資料２）の作成を行い、学習チェック（初期・中期・後期）を行った。その学生の評価を、経時的におってみた。表４に示されるとおり、学生自身の評価として、次第に回を重ねるごとに自己評価が深まっていったことが伺える。

特に、著しい伸びが見られた3.6以上の項目を上げると、以下、表５のとおりである。

評価項目の半数以上が、3.6以上という高い評価結果から、学生は、自らの判断で、研究を進めていき、主体的学習としての姿勢が取れ、演習の目的は達成できたのではないかと推測される。

⑶　使用教科書について

教科書として、「精神保健福祉援助演習（へるす出版）」を使用した。学生には、教科書のページを指し示し、演習での実際と教科書でとの統合に努めた。しかしながら、教科書の内容のすべてを網羅するということはできなかった。我々は、必要時に学生自身が、自己学習を進める上で、教科書を活用する必要性が理解できればよいという認識であった。

⑷　演習の授業評価

①　学生の授業出席としての評価

受講学生の23名の中、すべて出席した学生は17名であった。

又、１回の欠席は３名、２回の欠席は０名、３回の欠席は１名、４回の欠席は１名であった。大多数の学生は積極的に参加したという状況であった。出席率は97.2%という高出席であった。

②　筆記テスト

この授業のまとめ・評価としては、筆記問題と自分の考えを問う問題を作成した。

特に筆記問題については、学生には２年後の国家試験という課題があり、自己学習がよくなされたようである。筆記問題は五者択一で、○×方式の国家試験に順ずる問題を提出した。授業中、学生自身が発表した内容からの出題であり、平均、76.4点という高得点であった。

4　演習の総合的考察

当大学で学ぶ福祉は生活実践のなかで活かされるべきものである。しかしながら大学という教室の中では、ともすれば、生活実践から遊離し、現場実践へ知識と適応が次第に低くなることも十分に考えられる。このことを防止するためにも、演習という教科は重要な科目である。

ここで、演習を実施し、学生自身の学習効果、グループによる学び、教員のかかわり、演習の意味についてそれぞれ述べることとしたい。

１）学生自身の学習効果について

当初、学生は自分の興味のあるテーマにそって、演習を進めていったが、次第に、自

分以外の学生とコミュニケーションを取るにしたがって、「メンバーの考えを理解しようとしていることを示した」「学習項目に優先順位をつけた」というグループでの作業に切り替えている。演習では、設定したテーマへの調査・研究だけでなく、「コミュニケーション」というグループ内の人間関係が重要になってくる。

演習の隠れた狙いとして、グループ内での人間関係の構築であることが暗黙の了解として、教員・学生ともに理解している。単なる、課題学習の遂行でなく、人間関係をベースにした「演習」が求められるのである。なぜなら、この考え方は、特に福祉の仕事を進める上で、ソーシャル・ワーカーはクライエントとの人間関係の良好性が極めて重要になってくるからである。

とかく、現代人は人間関係が希薄になっていると報じられている。しかしながら、本演習では研究者を育成するものではない。困難ではあるが、人間関係にバランスの取れたソーシャル・ワーカーの養成が期待されるのである。この演習はそのための必須の指定科目でもある。対人援助職である福祉の職を目指す学生にとっては、重要な取得すべき要素である。

この演習の実施方法については、学生自己評価表の、初期・中期・後期を通してみると、殆どの学生が、時間的経過とともに自己評価の得点が上昇している。グループワークは学生にとっては殆どのものが有効な方法であったと考えられる。

また、学生の演習への参加状況（97.2%）もよく、発表に向けての姿勢は積極的であった。そして殆どの学生が自己評価表の評価値が後期には伸びていたことである。このことから言えることは、そして、重要なことは殆どの学生が学生自身、学習効果があったと認識したことである。自己認識は学習の達成感をもたらし、意欲を高めるので、学習効果の顕在化は重要であろう。

2）グループによる学びについて

グループワークの中で、学生自身、自分で役割分担が出来たようであった。表5から、多くのことがグループから学ぶことができ、特に人間関係の学びを得たとの評価であった。

次第に人間関係が取れ、しかし、自分の意見が言える関係の芽生え、そして、仲間と一緒の学びの深さと広さが読み取れる。このグループは、決して自らが希望して作ったグループではないがコミュニケーションをとることにより、次第に仲間意識が深まっていく様子がうかがえる。このことは、学びの進展とも関係する。

精神保健福祉士の仕事は、まさに人間関係の上に成り立っている。どのような人とでも話し、その人の QOL を高めるための努力が常に求められる。実践の人間関係は本や講義から学ぶのは困難であり、実際の演習や、実習、実践の中でしか磨かれないものである。

学問の知識は、実践の道標にはなるが、自分自身が支援者として実践するためには、自らの積極性と対人との距離の取り方が重要となってくる。また、「自己の到達目標を

達成できた」という学生の自己の達成目標がグループの中で達成できたことは、グループ活動の中でも、十分に自己の課題を投影し、達成できるということを意味する。

そのような観点から、演習という教科は、人間関係を試行錯誤しながら構築するのに重要で、きわめて必要な科目であろう。演習の狙いは、グループ内での人間関係の構築であることは異論の余地はない。このことはどこにも記載されていないが、暗黙の了解のうちに、学生自身も「メンバーの考えも理解しようとしていることを示した」という得点が高くなっていることからも、意識的に努力していることが理解できる。

ソーシャル・ワーカーである精神保健福祉士は、実際の仕事を進める上で、クライエント及びクライエントを取り巻く人たちとの人間関係をとりながら、目標を達成していくことが求められる。しかも、どのような状況に陥っても、クライエントの人権を擁護するためには、クライエントとの人間関係の構築が重要になってくる。

最初は自分中心の興味のあるテーマでの学習であったが、次第にメンバーと協力して、達成することが自分の役割であるとの姿勢に移っていった。そのことからすれば、本演習は、指定科目としての意義があると考えられる。

まずは友人関係、教員との関係、地域の人との関係の構築がうまくなされること、そして大事なことは他者を受け入れる体験が得られることが、人間関係のベースとなる。

さらには、初対面の相手からも受け入れ、また受け入れられる関係の「演習」が求められよう。

３）教員のかかわりについて

この演習は精神保健福祉士受験資格取得のための前提とされた演習ではあったが、今後はコース変更により、実習に行かない学生も入ってくることが予想される。そのため今後の演習のあり方もちがってこよう。

しかし、今回、学生とのかかわりで、我々がもっとも注意したことは、ともに進むという姿勢である。時には「困難さ」を提供することも大事である。プログラム学習ではなく、どのような方向でも、目標の確認さえ、抑えて実施することが重要である。

このことは学生を信じるという初歩的な教育観を持つことであろう。意図的な学習ではなく、大学生としての行動を認めることであろう。教員自身も必要時、助言に入り、より積極的に自らの課題の解決に向けて取り組むように指導したつもりではあるが、難しい部分もあった。

しかしながら、研究調査において、教員の助言を受け、実際の現場に直接足を運び、学生が障害者等の生の声を聞いてきたことは大きな収穫であった。

現場とは、富士河口湖町役場、ユニクロ、健康科学大学、ダルク、精神障害者授産施設、クリニックであった。

４）演習の意味について

地域社会に実際に出かけ、障害者自身や関係者の実際の声を聞いてくることは、大人

の集団や社会の仕組みに少なからず触れ、体得してくることが重要な体験となる。殆どの学生が学びの評価を出している。このことが演習の中で、習得されることが重要である。グループごとの調査・発表を通して、それぞれに切磋琢磨したものであった。成果も大事であるが、この狙いは、地域社会で実際に大人と話すこと、自分の思いや考えを伝えること、そして結果を出すこと、それを全体の前で発表することである。

結果発表については、それぞれのグループが調査の実態をまとめ、それぞれユニークな発表であった。各グループは互いの発表を聞き、必要な知識の習得をしたと考えられる。しかし、この演習を通して、学生に体得させたいことは、各自がグループで一つ課題を作り上げることであり、決して他のグループと競争することではない。

それは地域の中で、学生が学生としての礼儀を守って、学生らしく、勉強のために発表の材料を取得し、その材料を基にして、作り上げることである。

学生たちは発表日が近づくと、大忙しの日々であった。発表までに不安なこともあったが、何とか、発表にこぎつけた。発表はおおむね全員が発表内容を共有したようである。

ここで、この演習が精神保健福祉援助の学習全体の中で、どのような位置づけであるのかを振りかえり、学生にとって、どのような意味があるのか、考察を行いたい。

精神保健福祉を学ぶことで、学生は一体何を得るのであろうか。学生にとっては、グループワークの過程で、グループが維持できないこともあった。すべてのグループがうまくいくとは限らないことは当然のことである。

そのようなグループワークでは、自分の意見を自分の言葉で発表し、記録するというのは、苦手なようであった。しかしその苦手の体験が重要であり、学びの原点でもある。

現代のデジタル思考になれている学生にとって、自分の考えを表現し、それが良いか否かという判断ではなく、一人ひとりがその考えを尊重されなければならないということを理解できたかがきわめて重要である。

国家試験で問われるデジタル思考は、福祉という現場で、一人ひとりの人権が尊重される考えとは少し異質なものである。バイスティックが述べているように、どのような考えであっても、第１義的には「聴く」という姿勢である。「聴く」過程においては、自己の判断が入ってはならない。学生はどうしても良かったか、あるいはそうでないかの判断を求めたがる場合が多い。このことを体得するには、まだまだ学生にとっては、生活体験の少なさ、受容の脆弱さが存在する。演習でそのことを達成することは、土台無理であろう。しかしながら、少しでも、相手の気持ちが分かっただけでも前進である。このことが積み重ねられれば、支援者としてクライエントの前に立てることが期待される。

演習がソーシャル・ワーカーの態度の育成という一側面を考えれば、この演習は、専門職の養成には重要な位置づけである。しかし、与えられた指定時間はあまりにも少ない。我々はそのことを十分に踏まえ、学生の指導に当たっていくことが肝要であろう。

つまり、精神保健福祉援助演習は、ある面では、態度教育の一連の科目であるといえる。

そのことに関しては、「精神保健福祉援助演習Ⅱ」が後期よりはじまる。次回は、グループ学習ではなく、個人の責任での参加を求める予定である。自分自身の生活や、事例を通し、精神保健福祉士に関しての課題をどのように見出すかを求める予定であり、このためには、しっかりとした、仲間作りと仲間から学べるという体験を確固としたものにしなくてはならない。

学生自身が自ら疑問を持ち、自分の力はもとより、周囲の人と一緒に課題を解決できれば、演習の目的は達したと評価する。

この演習の授業が終了すると学生がそれぞれ希望した実習へと行く予定である。実際の場面で、自己の勉強不足や非力に落ち込むことがないよう、また、スムーズに実習を自分のものとして、取り組むことが出来るようにするのがこの演習の位置づけであろう。加えて自身の力不足と自信を同時に学ぶことがこの演習の目的であろう。

演習という、「実践」と「知識」の橋渡しである授業は、なかなか厳しいものがあるのが現実である。学生自身どのようにこの演習を捉えたらよいか認識しているかは不明であるが、教員はこの意味を学生に伝えることが必要である。教科書の中にある知識を覚えても、なかなか、実践の中では活用できないことも多い。実習の準備のためには、知識と心構え、人間関係の実践習得が必要である。

最初と最後のアンケートを見ると、課題への理解が深まったとの意見が殆どであった。

演習では、目標を明確に学生に伝え、自分の人間関係の能力の向上に努力すること、そのためには、仲間からともに学ぶということを仲間に伝えることが必要であろう。単なる知識の構築では、ソーシャル・ワーカーとしての専門職種にはなりえないのである。ソーシャル・ワーカーには人間関係に裏付けられた実践的ケースワークが求められる。

本演習の中で、学生自身が人間関係の難しさを体験し、そのことが自分自身の様々な学習行動に影響していることを学んでくれれば、成功である。

5　今後の課題

演習におけるグループワークでの学びは重要ではあったが、学生が均等に学んだとは言い難い。なぜなら、興味のあるものがグループの中でも、少しずつ違ったからである。今後は、学生個人の興味や関心への充足が重要となるであろう。

今後、後期に予定される「精神保健福祉援助演習Ⅱ」の課題としては、グループで得た知識や人間関係ベースにして、個人の取り組む課題を表現することであろう。自分自身が興味のある材料を自ら探し、実習に向けての取り組みのために、事例や地域での材料を探し自己研鑽をする必要があろう。講義では、どうしても受け身の姿勢が出やすいが、今後は大学生としてふさわしい学習態度が必要であろう。グループでの学び、個人

での学びも、自ら学ぶ姿勢の習得が重要である。基本的には、学習は個人での学習行動が原則である。

このことを念頭に、後期の「精神保健福祉援助演習Ⅱ」では個人学習に力点を置いた自ら学ぶ学習を、演習の中で習得を図ることが重要であろうと考える。

参考文献

1）日本精神保健福祉士養成校協会「新・精神保健福祉士養成講座７　精神保健福祉援助演習」 中央法規出版株式会社　2010

2）精神保健福祉士養成セミナー編集委員会「[改訂第３版] 精神保健福祉士養成セミナー／第７巻〔増補〕精神保健福祉援助演習」 へるす出版　2008

3）大利一雄「グループワーク理論とその導き方」 勁草書房　2003

4）山田規畝子「高次脳機能障害者の世界～私の思うリハビリや暮らしのこと」 協同医書出版社　2009年

5）瀧澤　学「高次脳機能障害の地域支援」 リハビリテーション第505号　Ｐ10－13　鉄道身障者福祉協会　2008

Abstract

This study focuses on the course 'Seminar of Psychiatric Social Work' at Health Science University (HSU) in order to discuss its place in various psychiatric courses offered at HSU, and to determine its significance. In this seminar, students form groups and participate in various group activities. Learning checks, which were based on self-evaluation forms filled out by the seminar students, were performed three times during the semester (in the early, middle and late stages). The seminar attendance rate was 97.2%, and the rating scores on learning increased over time. In this age of Information Technology (IT), we tend to have digital thinking patterns ; we view and judge things (or others) based on clear and rational criteria. Possessing such thinking, students have a propensity for labeling clients' thoughts or emotions as either good or bad. In fact, it is not easy to see others for what they are without any value judgment. It is believed that this seminar provided students with ample opportunities to listen to others' voices and understand their feelings through group activities. Since the ultimate goal of the seminar is to cultivate attitudes necessary for social workers, this seminar plays an essential role by training the future specialists in this field.

Keywords : seminar
group work
self-evaluation
cultivate attitude